

3. 発生予察情報の発表状況

1) 注意報の内容

種 類	発令月日	対象作物	対象病虫害	情 報 内 容
注意報第1号	4月12日	麦類	赤かび病	1. 発生地域：県下全域 2. 発生時期：4月中旬以降 3. 発生程度：やや多 4. 根拠： ①麦類の出穂日は4月2半旬に集中しており、二条大麦、裸麦で平年並、小麦で平年比5日早い。この時期の天候不良は本病の感染に好適である。 ②3月後半より断続的に降雨があり、気象予報によると今後の降水量も平年より多いとされており、赤かびの発生を助長しやすい。
注意報第2号	4月12日	ジャガイモ	疫病	1. 発生地域：県下全域 2. 発生時期：4月上旬以降 3. 発生程度：多 4. 根拠： ①早出し栽培では、4月3半旬の発生圃場率が40%（3月下旬8%）であり病勢の進展が著しい。 ②普通栽培では4月5日に愛野町で初発を認め、4月3半旬の発生圃場率は2.3%であった。 ③3月後半からの断続的な降雨により、ばれいしょの生育は軟弱徒長きみである。 ④天気予報によると今後の降水量は平年より多いとされ、疫病の発生を助長しやすい。
注意報第3号	6月15日	水稻	いもち病	1. 発生地域：県下全域の早期、普通期水稻 2. 発生時期：6月中旬以降 3. 発生程度：やや多 4. 根拠： ①早期水稻での葉いもちの発生は5月6半旬よりみられ、6月中旬には各地で発生がみられた。 ②5月下旬、一部に発生圃場率86%、発病株率25%の多発生の地域がみられたが、6月中旬には発生圃場率100%、発病株率96%と発生程度が高くなっており一部にずり込みもみられた。 ③5月下旬以降の日照時間は顕著に少なく、いもち病の発生に好適な曇雨天が続いており、水稻は軟弱徒長気味である。 ④いもち病耐病性の低い品種の作付が増えており、不順な天候が続くと葉いもちが多発しやすい。
注意報第4号	7月2日	早期水稻	穂いもち	1. 発生地域：県下全域 2. 発生時期：7月中旬以降 3. 発生程度：やや多 4. 根拠： ①早期水稻での葉いもちの発生は5月6半旬よりみられ、6月中旬以降各地で発生がみられた。 ②6月下旬の巡回調査の結果、葉いもちの発生圃場率は49%、発病株率14%で、一部にずり込みもみられた。 ③5月下旬以降の日照時間は顕著に少なく、いもち病の発生に好適な曇雨天が続いており、水稻は軟弱徒長気味である。 ④気象予報によると7月の平均気温は平年並、降水量は平年より多く、日照時間は平年より少ない見込みである。

種 類	発令月日	対象作物	対象病害虫	情 報 内 容
注意報第5号	7月2日	水稲	セジロウンカ トビロウンカ	<p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生程度：やや多</p> <p>3. 根拠：            ①6月30日～7月2日にセジロウンカの多飛来がみられた。主体はセジロウンカであるが、トビロウンカの飛来量も多かった。            ②7月2日県予察圃場普通期水稲におけるセジロウンカの株当たり虫数は13.4頭、トビロウンカの株当たり虫数は0.3頭であった。            ③7月2日県央地区での調査の結果全域に発生がみられ、1株当たり平均虫数はセジロウンカで19.6頭とほ場での成虫密度は高く、1株当たり成虫数が30頭以上のほ場も各地でみられた。</p>
注意報第6号	7月5日	水稲	コブノメイガ	<p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生程度：多</p> <p>3. 根拠：            ①6月30日～7月4日にかけて飛来がみられ、蛍光灯誘殺箱（諫早市貝津）における誘殺数はここ数年間で最も多い。            ②7月3日、県予察圃場早期水稲における10㎡当り成虫数は16.2頭（前年7月6日：0.3頭）であった。            ③7月3日、諫早市貝津早期水稲における10㎡当り成虫数は51.8頭（前年7月6日：2.7頭）と生息密度は高かった。            ④7月3日に実施した県下一斉調査の結果、県下各地で成虫の生息が認められ、雑草地における10㎡当り成虫数が10頭以上の地区も多数認められた。            ⑤曇雨天が続き、水稲は軟弱徒長気味で分けつも少ない。</p>
注意報第7号	9月4日	水稲	斑点米カメムシ類	<p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生程度：やや多</p> <p>3. 根拠            ①8月上旬の巡回調査の結果、早期水稲における発生圃場率は4.7%、20回すくい取りで0.1頭であった。            ②8月上旬の雑草地における生息量は20回すくい取りで平均1.8頭（前年1.4頭）と多く、また幼虫の割合も高かった。            ③諫早市貝津の定点における生息量は、20回すくい取りで8月6日ホソハリカメムシ1.4、3頭、クモヘリカメムシ5頭、シラホシカメムシ4.3頭、8月16日、ホソハリカメムシ3.4頭、クモヘリカメムシ2頭、シラホシカメムシ1.6頭と増加している。            ④気象予報によると8月下旬の平均気温は平年並、天候は晴れの日が多いと予想されている。</p>
注意報第8号	9月3日	大豆	ハスモンヨトウ	<p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生程度：やや多</p> <p>3. 根拠：            ①8月までのフェロモントラップによる誘殺量は平年より多い。            ②8月下旬の巡回調査の結果、白変葉発生圃場率は88%（前年63%）、平均寄生株率3.9%（前年9.5%）、平均株当たり寄生頭数0.4頭（前年0.7頭）であった。</p>

種 類	発令月日	対象作物	対象病虫害	簡 報 内 容
注意報第9号	9月3日	柑橘	カメムシ類	<p>1. 発生地域(対象地域)：県下全域</p> <p>2. 発生時期：9月以降</p> <p>3. 発生程度：やや多</p> <p>4. 根拠</p> <p>①8月下旬、予察灯での誘殺量は増加傾向にある。</p> <p>②8月中旬のヒノキ毬果調査の結果、若・中・老齢幼虫及び成虫の寄生が認められた。一部寄生密度が高い地点も認められ、寄生ヶ所率は5.4%（前年2.3%）、1枝当りの平均寄生虫数はチャバネアオカメムシ2.5頭（前年0.2頭）、ツヤアオカメムシ0.4頭（前年0頭）であり、ツヤアオカメムシの寄生も目立った。</p> <p>③ヒノキ毬果の着果量が平年に比べ多い。</p>
注意報第10号	9月19日	ジャガイモ イチゴ ハクサイ キャベツ アスパラガス	ハスモンヨトウ	<p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生程度：やや多</p> <p>3. 根拠</p> <p>①県予察圃場のフェロモントラップによる誘殺量は平年より多い（第1表）。</p> <p>②9月上旬の巡回調査の結果、いちごの被害発生圃場率は育苗床で2.9%（前年7.1%）、平均被害株率は3.3%（前年8%）であった。</p>
注意報第11号	10月2日	柑橘	青かび病 緑かび病	<p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生時期：10月以降</p> <p>3. 発生程度：やや多</p> <p>4. 根拠：</p> <p>①9月14日に台風17号、9月27日に台風19号が来襲したため傷害果や裂果等も多くみられる。</p> <p>②10月1日、極早生温州圏で発病果実がみられた。</p> <p>③気象予報によると10月上旬の降水量は多い見込みである。</p>

2) 特殊報の内容

種 類	発 令 月 日	対 象 作 物	対 象 病 害 虫	情 報 内 容
特殊報第1号	12月26日	キク	マメハモグリバエ	<p>1. 発生確認：平成3年 7月 9日</p> <p>2. 種の同定：平成3年10月17日</p> <p>3. 発生場所：沓岐郡芦辺町</p> <p>4. 診断同定：平成3年7月9日、芦辺町諸吉仲触のキクに寄生しているマメハモグリバエを採集し、総合農林試験場病害虫科より元京都府立大学教授笹川満廣氏に同定依頼の結果、マメハモグリバエであることが確認された。</p> <p>5. 発生状況：県内での発生は芦辺町の施設栽培のスプレーギク10a（本圃及び親株床）のみである静岡、愛知など東海地方のキク、ガーベラ、セルリー、トマトなどで発生し、問題となっている。</p> <p>6. 形 態：</p> <p>1) 成虫：体長約2mmで頭部は黄色、胸部と腹部の側面も黄色、他は光沢のある黒である。</p> <p>2) 卵：円筒形で長さは約0.2mmである。</p> <p>3) 幼虫：黄褐色のウジで、体長は成長すると約2.5mmになる。</p> <p>4) 蛹：褐色の俵状で長さは約2mmである。</p> <p>7. 発生生態：雌成虫は産卵管で葉に小さな穴を開け、にじみ出る汁液を摂食する。産卵も同じ方法で行い、葉の中に1個ずつ産む。1雌当りの産卵数はキクやセルリーでは300～400個である。幼虫は葉にもぐり、トンネルを作って食害する。老熟幼虫は葉の表皮を食い破って脱出し、土の表面や地中の浅いところで蛹化する。マルチではビニール上で蛹化する。1世代の期間は、15℃で約50日、20℃で約23日、25℃で約16日、30℃で約14日である。寄主範囲はきわめて広く、外国では21科120種にも及ぶといわれている。特にキク科、セリ科、マメ科の植物を好む。ただし、イネ科（イネ、トウモロコシ）、バラ科（イチゴ、バラ）の植物への摂食、産卵は認められていない。</p> <p>8. 被 害：幼虫の食害痕が葉に残り、花き類では商品価値が低下する。発生の多い株は発育が悪くなる。静岡農試の調査によると被害が特に大きいのは、キク、ガーベラ、マリーゴールド、セルリー、などである。またナス、キュウリ、ダイズ、チンゲンサイ、レタスなどの被害も大きい。</p> <p>9. 防除対策</p> <p>1) 黄色吊下げリボンで発生量を把握する。</p> <p>2) 本種対象の登録薬剤はないが、キクに他害虫で登録のあるイソキサチオン乳剤、アセフェート粒剤で同時防除を行う。</p>
特殊報第2号	3月31日	トマト	トマトサビダニ	<p>1. 発生作物：ミニトマト</p> <p>2. 確認年月日： 発生確認：平成4年3月10日、 種の同定：平成4年3月25日</p> <p>3. 発生場所：平戸市</p> <p>4. 診断、同定</p> <p>平成4年3月10日、平戸市のミニトマトで茎葉部の褐変、葉の枯死症状がみられ、病害虫防除所において顕微鏡観察をした結果、サビダニの寄生を確認した。</p>

種 類	発 令 月 日	対 象 作 物	対 象 病 害 虫	情 報 内 容
(特殊報 第2号)				<p>総合農林試験場病害虫科より埼玉県園芸試験場 根本久氏に同定依頼した結果、トマトサビダニ <i>Aculops lycopersici</i> (MASSEE) であることが確認された。</p> <p>5. 発生状況          県内では平戸市の施設栽培のミニトマト（品種：ミニキャロル、サンチェリー）で初めて発生を認めた。その後、松浦市の施設栽培のミニトマト（品種：ミニキャロル）でも発生を確認した。          平戸市の発生圃場における被害株率は100%、株の被害程度43、被害果房率は56%、果房の被害程度21であった。          被害株では、葉の褐変枯死、茎、果房、果実の褐変がみられる。          なお、本邦での発生は昭和61年に沖縄で初確認され、その後九州（鹿児島、福岡）、四国、本州で発生が確認されている。</p> <p>6. 形 態          本種はフシダニ科に属し、体形はくさび形で体長0.15～0.2mmと微小で、体色は黄赤褐色をしている。</p> <p>7. 発生生態          本種の最適生育条件は26.5℃、相対湿度30%前後であり、高温乾燥条件下で多発する傾向がみられる。1齢幼虫、2齢幼虫を経て成虫となるが、休眠期はなく、最適条件下での卵期間は2日、1齢幼虫期間は1日、2齢幼虫期間は2日で、1世代の生育期間は6～7日である。米点下になるような野外では越冬できない。</p> <p>8. 寄主植物          寄主植物としては、トマト、ナス、パレイショ、タバコなどナス科植物が知られている。</p> <p>9. 被害の特徴          本種は主にトマトの葉に寄生し、加害された葉では裏面が光沢を帯びた褐色を呈し、やがて周縁部から褐変枯死する。被害は通常、下位の茎葉から始まり、次第に上位へと進行するため、下葉から枯れ始めるのが特徴である。また、本種は葉ばかりでなく茎にも寄生し、加害された茎は褐変する。多発すると果実にも寄生し、果実は褐変してサビ果となる。</p> <p>10. 防除対策          1) 収穫期に入ってから薬剤防除は困難であるので、発生初期の防除に努める。          2) 生育初期での発生では、サビダニが飛散しないよう注意して寄生株を抜き取り、ハウス外で焼却処分する。          3) 生育中後期での発生では、寄生茎葉を取り除き、ビニール袋に入れてハウス外に持ち出し、焼却処分する。          4) ハウス内を乾燥し過ぎないようにする。          5) 現在登録のある薬剤はないので、ケルセン乳剤、モレスタン水和剤によりハダニ類との同時防除を行う。</p>